

# 帰米二世との「国際結婚」

## —飯沼信子さんのライフ・ヒストリーを通して—

嘉本伊都子

### 要旨

旧姓長田信子さんは、アメリカ軍に徴兵され極東での勤務を志願した飯沼星光さんと渋谷の富ヶ谷教会で結婚式をあげ、1953年9月に軍用船で海を渡った。彼女自身は戦争花嫁だとは思っていない。なぜなら星光さんはアメリカで生まれた二世ではあるが、幼少期から青年期までを日本で過ごしたいわゆる帰米二世であるからだ。日本人という同人種ゆえに国際結婚とは位置づけていないのである。しかし、アメリカ国籍をもつ日系二世のG・Iと、日本人女性との結婚は、敗戦後の国際結婚の歴史なかでも重要な位置を占める。飯沼信子さんのケースを取り上げることによって、研究上、焦点が当てられてこなかった帰米二世との「国際結婚」について考察していく。

キーワード：帰米二世、国際結婚、戦争花嫁

### はじめに

飯沼信子さんは、『野口英世の妻』（新人物往来社、1992）、『高峰譲吉とその妻』（新人物往来社、1993）、『長井長義とテレーゼ—日本薬学の開祖』（日本薬学会、2003）、『野口英世とメリー・ダージス—明治・大正 偉人たちの国際結婚』（水曜社、2007）など、明治から大正期にかけて欧米で国際結婚をした人物を詳細に追ったノンフィクション作家である。野口英世の遺言の発見などロサンゼルス（以下LA）在住ならでの仕事をし、彼女自身が戦争花嫁の時代に海を渡った花嫁の一人でもある。

旧姓長田信子さんは、アメリカ軍に徴兵され極東での勤務を志願した飯沼星光さんと渋谷の富ヶ谷教会で結婚式をあげ、1953年9月に軍用船で海を渡った。彼女は自らを戦争花嫁だとは思っていない。なぜなら夫星光さんはアメリカで生まれた二世ではあるが、幼少期から青年期までを日本で過ごしたいわゆる帰米二世であるからだ。日本人という同人種ゆえに国際結婚とは位置づけていない。さりながら、アメリカ国籍をもつ日系二世のG・Iと、日本人女性との結婚は、敗戦後の国際結婚の歴史なかでも重要な位置を占める。飯沼信子さんのライフ・ヒストリーを通して、なぜ日系二世、特に帰米二世との「国際結婚」が戦争花嫁研究において取り上げられることがなかったのか。さらに、飯沼夫妻がいかに親族ネットワーク、日系ネット

ワーク、戦争花嫁ネットワークに関わりながら適応していったかを分析する。

## I. 写真花嫁から戦争花嫁へ

### 1. 研究の背景

アメリカは1882年には中国人の入国を禁じる中国人排斥法を、85年には契約労働者の移民入国を禁止した。東洋人に対する人種差別は、増加する日本人移民に対しても排斥の矛先が向けられた。日清・日露という二つの戦争に勝った日本及び日本人を、「イエロー・ペリル（黄禍）」視する風潮は強まっていった。1906年のサンフランシスコ大地震後、サンフランシスコ市内に通う日系の学童を東洋人学校へ隔離するという事件がおこる。新たな日本からの労働移民を自粛するいわゆる「紳士協約」が日米政府間で結ばれたのは大地震から2年後の1908年のことであった。

後述するように白人と「白人が異人種とラベリングする人種」との婚姻を認めない異人種間婚姻禁止法が多くの州で制定されていた。日本人が「白人」と結婚することは稀であった。さらに、アメリカへ移民した日本人男性にとって同郷にいる日本人女性と写真を交換し、日本で戸籍への届け出をすませ、妻として花嫁のみが渡米するという、いわゆる「写真花嫁」が結婚へのほぼ唯一の手段であった。労働移民の渡米が難しくなるなかで、紳士協約において写真花嫁の渡米は禁止の対象外とされたため、20世紀初頭から「日本着」をきた日本人写真花嫁が続々と太平洋を渡った。写真花嫁については多くの研究がある（工藤1983、真壁1983、増淵1986、柳澤2003、2004ab、2005、2006、2007、2009、山本茂美2005、田中景2002、2004、2006など）。さらに、写真花嫁と戦争花嫁の両方を取り上げる研究も近年では、注目される（島田ほか、2009）。

1913年に成立したカリフォルニアの外国人土地法は「アメリカの市民権がなければ」、つまり、帰化することができない日本人（1790年帰化法）には、土地の所有、賃借や譲受に制限を設けた。だが、アメリカは生地主義の国籍法である。写真花嫁たちが産む子は、アメリカ生まれアメリカ育ちの二世であり、アメリカ国籍を取得できる。そこで日本人移民たちは、二世の名義で土地を借用したり購入した。ところが紳士協約で日本人労働移民を制限しても、写真花嫁たちが「まるで兎のように」（飯野、2000：45）子どもを産むだけでなく、自ら労働者として働くことに排斥の鋒先が集中するようになる。1908年の紳士協約では許されていた日本人花嫁の渡米も1920年の淑女協約により、写真花嫁としてのビザの発給は停止となった。さらに、1924年にいわゆる排日移民法が成立する。この移民法に付帯条項としてつけられた「帰化不能外国人の入国禁止」条項があった。日本人と名指しされたわけではないが、この移民法は「排日移民法」と呼ばれる。それは1922年のいわゆるオザワ判決による影響が大きい。アメリカの連邦最高裁は、帰化を求めた小澤孝雄へ「日本人には帰化権なし」という判決を下したばかりであった（桑井、1995）。このように、1920年から日本人女性は花嫁として渡米することは不

可能となっただけではなく、日本からの移民そのものが禁止されていった。アメリカ生れの日系二世はアメリカ国籍を有する一方で、血統主義をとる日本では両親が領事館に届け出さずれば日本国籍を有する二重国籍であったことも、日系人への差別を強める。1916年に大日本帝国国籍法を改正し、重国籍者の国籍離脱を認めるものの、日本政府側の努力もむなしく、日米関係は悪化していった。

1930年代半ばから教育を日本で受けさせようと、一世たちのなかには二世を祖国日本へ帰した。二世のなかでも、こうして日本で教育を受け、再びアメリカへ帰国した二世を帰米、あるいは帰米二世という。帰米二世の研究は、さほど多くはない（桑井、1993、1998、河野、2005、2006）。

1941年12月の真珠湾攻撃による日米開戦は、多くの日本人移民、日系二世たちを敵性国民として荒野のなかに建設された有刺鉄線で囲われた強制収容所に幽閉した。同じ敵性国民として、イタリア系やドイツ系の移民が強制収容所へ入れられることはなかった。異人種、すなわち「イエロー」とラベリングされた日本人、及び、アメリカ国籍をもつ日系人たちでさえも強制収容所に入れられたのである。人種の壁は大きかったといえよう。

強制収容所に入れられた日系二世たちには、アメリカに忠誠を誓い米軍へ志願し、日系部隊としてヨーロッパ戦線に参加したもの、アメリカ人としての地位向上をめざしたもの、帰米二世はその日本語力が評価されて日本軍の暗号解読に活躍したり、アメリカ軍や政府のために日本語教官となったものもいた。同じ二世でも日本で軍国的な教育を受けた帰米二世のなかには、アメリカに忠誠を誓うグループに対し、反抗的な態度を貫くものもいた。さまざまな立場の日系二世たちがいる。日系二世といっても、その親がいつ、何歳で渡米してきたかによって、出生コーホートに30年近くの間隔があり、どこでいつ育ったかでも境遇は随分と異なる。

狭く閉ざされた空間である強制収容所は、花嫁の供給源を断たれた日系人たちにとって、期せずして伴侶を見つける出会いの場になった。アメリカ社会における日系人の社会的な位置の変遷を踏まえるならば、元敵国の女性である戦争花嫁との結婚が合法化され、海を越えていくことが可能になったという歴史的事実そのものが、いかに画期的であったかが理解されよう。

アメリカ連邦議会は1945年12月28日に公法271(戦争花嫁法 The War Bride Act)を採用した<sup>1)</sup>。しかし、1924年の排日移民法によって「帰化不能外国人」とされた日本人花嫁はその適用外であった。1946年6月29日の公法471号(G・Iフィアンセ法)<sup>2)</sup>は、3ヶ月間にアメリカ人と正式に結婚するならば、永住権を取得できるとする法律であり、その期限は1947年7月1日までとした。しかしその他の条項は1924年の排日移民法の規定に従った。よって、G・Iフィアンセ法でも日本人花嫁はアメリカへの入国が認められなかった。

1) 1924年の移民法により各国に課せられた移民の割り当て外で第二次世界大戦に従軍した米国兵士・軍属の配偶者(妻又は夫)及びその子どもは、公法271の成立により、アメリカの入国が認められるようになった。  
2) G・Iフィアンセ法は、まだ正式に結婚していないが米兵士・軍属と結婚予定のものについて、婚約者の入国を優先的に「割り当て内」ビザを発給した。割り当て人数を越えた場合は非移民としての三ヶ月間の一次滞在用の訪問ビザを発給した。

占領下の日本では日本語のできる日系二世兵士が多く駐留していたにもかかわらず、同じ人種とはいえ日本人女性との婚姻はアメリカ側に認められていなかったことになる。この事態の打開に向けて大きな役割を果たしたのが、排日移民法が成立した5年後の1929年に設立された Japanese American Citizens League (日系アメリカ人市民連盟、以下JCALと略す)である。日系二世の弁護士、マイク・マサオカが中心となったJACLの反差別委員会は、私法によって日本人女性の入国を連邦政府に認めさせてきただけでなく、ついに公法213を成立させた(安富、2003)。

45年の公法271(戦争花嫁法)が改正され、公法213として1947年7月22日に「人種に関わりなく」配偶者の入国を認めた。こうして米兵士・軍属の日本人妻及び婚約者のアメリカ入国が認められたため、公法213は日本人花嫁法(Japanese Brides Act)という別称がある。だが、この法律は施行から30日以内に結婚したケースに限って、その配偶者のアメリカ入国を認めたため、急いで結婚するカップルが続出した。なかには必要書類の取り寄せなど、結婚の準備や手続きに時間がかかり、期限に間に合わず、軍の許可をもらえなかったケースもあった。

JACLの機関誌、The Pacific Citizenの1947年8月30日付によれば、在横浜米国領事であるアレキシス・ジョンソン氏は、日本人花嫁法(公法213)の有効期間中(同年7月22日～8月21日)の30日間に、「日系人(原文ではJapanese Ancestry)597人、黒人(原文ではNegro)15人、白人(原文ではWhite)221人の合計823人」のG・Iから日本人女性との婚姻申請を受け付けたという<sup>3)</sup>。そのなかには54人の沖縄で勤務している男たちが含まれているが、大半が神戸や横浜の米国領事館に届けられたようだ。日本人花嫁法は、アメリカ本土の日系二世たちが活躍して成立させたが、太平洋の向こう側では、多くの日系二世たちがその語学力を買われて、占領下日本で活躍していた。日本人花嫁法が効力をもった期間に申請された婚姻件数の実に72%が日系二世との婚姻であったことになる。黒人は2%、白人は26%にすぎない。いかに多くの日系G・Iが日本人女性との結婚を待ち望んでいたかがうかがえる。

## 2. 戦争花嫁研究における日系二世と日本人女性

レジナ・ラークは、1949年から50年に日本人女性との結婚申請書を提出した420組の申請をランダムサンプリングし、全体の20パーセントにあたる84組を抽出した。その結果、42組が日系人兵士、41組が非日系人兵士、残り一組が「American racial stock」と記載されていた。つまり、ランダムサンプリングを行っても、半数は日系二世との婚姻であったことになる。ところが、ラークがインタビューした35人の男女のうち、男性は9人が白人(原文Caucasians)、

3) The Pacific Citizen 1947年8月30日付。レジナ・ラークの博士論文(1999年)によると、1947年7月22日及び同年8月23日付の米軍新聞『パシフィック・スターズ&ストライプス』(Pacific Stars and Stripes)の記事から、公法213で示した30日間の期間中に831組が結婚したが、その内訳は日系アメリカ人二世597組、白人211組、黒人15組のカップルであり、whiteとされた白人のカテゴリーのなかには「おそらくメキシコ系アメリカ人も含まれる」とラークはわざわざ記したうえで、圧倒的に日系人の申込者が多かったことを指摘している(Lark, 1999: 200-201)。しかし、これらの合計は823人であり、831人にはならないが、ラークはこの差異については言及していない。

2人のアフリカ系アメリカ人、一人の二世である (Lark, 1999: 46)。巻末に掲げられた Interviewsのリストから判断する (ちなみにリストには合計36名の男女がリストアップされている) に、日系の名前はNakamura夫妻のみで、アル・ナカムラはハワイ生まれの3世 (Lark, 1999: 172) とある。いずれにせよ、アメリカ国籍の夫12人中、日系アメリカ人男性は1人しか研究対象になっていない。

このようにランダムサンプリングの結果で半数を占める日系アメリカ人と日本人女性の「戦争花嫁」研究は軽視されてきたといえよう。さらに、戦争花嫁に関する書籍が2000年以降相次いで出版された。しかし、JACLが、戦争花嫁の入国に関して活動を行ったこと、日系人兵士との結婚が多かったことに言及はあるが、日系人男性と日本人女性のカップルを詳しく扱うことはなかった<sup>4)</sup>。

なぜ日系二世兵士と日本人女性の婚姻が取り上げられてこなかったのでしょうか。日米双方の研究者にとって、日本側からすれば日本人との結婚は国際結婚ではないという意識が強く、アメリカ側からすれば、同じ人種同士の婚姻はインターマリッジではないという意識が働くからだと考えられる。また、飯沼信子さんも「国籍が違うんだから、国際結婚と言えば国際結婚だろうけど、そう思ったことはないし、戦争花嫁という意識もない」と述べている。研究者、当事者ともに「戦争花嫁」という意識がないがために日系二世と海を越えた日本人女性の婚姻への研究は、国籍が同じでも異人種間の婚姻を扱うインターマリッジ研究からも、同人種でも国籍を異にする婚姻である国際結婚研究からも抜け落ちていたのである。さらに、日系二世のなかでも、婦米二世との「国際結婚」を扱うものは皆無に近い。

### 3. 異人種間婚姻禁止法

飯沼信子さんは、カリフォルニア生まれの飯沼星光さんと1953年に婚姻し、渡米する。結婚に際しては、星光さんの上官の許可が必要であったが同じ人種間の婚姻であったので何も問題視されなかったという。

公法213 (日本人花嫁法) が制定されても、アメリカの家族法は州の法律によるため、米国兵の出身によっては、異人種間婚姻禁止法が制定されていた州出身の白人 (White) と規定される兵士と日本人女性との婚姻は認められなかった可能性がある。星光さんが生まれたカリフォルニアは、1850年に異人種間婚姻禁止法を制定した<sup>5)</sup>。1901年にカルフォルニア州法第69

4) 植木武編著『「戦争花嫁」五十年を語る 草の根の親善大使』(2002 勉誠出版) 林かおり、田村恵子、高津文美子著『戦争花嫁 国境を越えた女たちの半世紀』(2002 芙蓉書房出版)、林かおり『私は戦争花嫁です アメリカとオーストラリアで生きる日系国際結婚親睦会の女たち』(2005 北國新聞社)、安富成良・スタウト梅津和子『アメリカに渡った戦争花嫁 日米国際結婚のパイオニアの記録』(2005 明石書店) 島田法子編著『写真花嫁・戦争花嫁のたどった道 女性移民史の発掘』(2009 明石書店)、Crawford, Miki Ward, Hayashi Kaori, and Suenaga Shizuko *Japanese War Brides in America: An Oral History*, (2010 Praeger Publishers) など。安富 (2010) 論文には、1名の日系二世と結婚した日本人女性のインタビューと分析が掲載されている。

5) All marriages of white persons with negroes or mulattoes are declared to be illegal and void. Laws of the state of California Chapt. 140. 1850 Cal. Stat. 206.

条には、モンゴリアンが加わった<sup>6)</sup>。日本が敗戦した当時、異人種間婚姻禁止法を制定するアメリカの州は戦前と変わらないほど多かった。カリフォルニア州で異人種間婚姻禁止法が撤廃されたのは、1948年のPerez v. Sharp判決である。1947年に“白人女性”とカテゴライズされたヒスパニック系のメキシコ系アメリカ人女性A・ペレスと黒人男性S・デイヴィスは、カリフォルニア州のロサンゼルス郡役所に婚姻許可を申請したが、役所はその婚姻を、州法第69条により無効であるとした。そこで異人種間の婚姻を禁止するこの州法そのものが憲法違反だと訴訟を起こした。R・トレイナーが首席判事を務めるカリフォルニア州最高裁判所法廷は、判事7人中トレイナーを含む4人が、州の禁止法は平等を定めた憲法修正第14条に違反しているとして、ペレスとデイヴィスの結婚を許可するように命じたのである（山田、2006：65）。

このカリフォルニア州の判決は、1967年に異人種間婚姻禁止法が違憲であるとした有名なラヴィング判決の19年も前のことであった。1958年ヴァージニア州キャロライン郡セントラル・ポイントにおいて、白人男性の夫リチャードと混血（アフリカ系黒人と先住民の系譜を引く）妻ミルドレッドは、1958年首都ワシントンDCで挙式し、ラヴィング夫妻となった。ところが、異人種間婚姻禁止法に違反したとされ、有罪判決を受ける。夫妻を有罪としたヴァージニア州の人種純血保全法の違憲性を問い、ついに、1967年6月首席判事アール・ウォーレン以下、合衆国連邦最高裁判事は全員一致でヴァージニア州最高裁の判決を破棄して、同州の人種純血保全法を合衆国憲法修正第14条に対して違憲であるとした。この裁判では全国黒人向上協会のみならず、JACLも違憲であるという考えをサポートしている。この判決以後、1969年にウエストヴァージニア、テキサス、フロリダ、オクラホマ、ミズーリが、1970年にノースカロライナ、1971年にジョージア、ルイジアナ、ミシシッピが、1974年にデラウェア、ケンタッキーの各州が異人種間婚姻禁止法を廃止していった（山田、2006）。

異人種間婚姻禁止法が廃止されたのは、州によってタイム・ラグがあり、日本人女性と白人の婚姻は、州によっては1970年代まで禁止されていた可能性が高い。西海岸でも、シアトルがあるワシントン州は戦前から異人種間婚姻禁止法が制定されていなかった。カリフォルニア州は上述したように1948年に、オレゴン州は1951年に廃止した。飯沼夫妻は、シアトルに船で着くと、その後、星光さんの姉夫婦と暮らすため、イリノイ州シカゴへと向かう。イリノイ州では、1874年に白人と黒人の婚姻の正当性を認めないとする異人種間婚姻禁止法を廃止している。よって、飯沼星光さんの出生地であるカリフォルニア州でも、飯沼夫妻が新婚生活をスタートさせたイリノイ州でも彼らが渡米した1953年には、異人種間禁止法は両方の地において廃止さ

6) No license must be issued authorizing the marriage of a white person with a negro, mulatto, or Mongolian” States of California Chapter CLV II p 322. /69p 336 1901. 山田史朗によれば、1905年には、中国人と同じ「モンゴリアン」として日系人も白人との結婚が禁じられる対象とされた（山田、2006：63）。しかし、筆者が調査したところ、カリフォルニアでは、1905年以前にモンゴリアンのなかに日本人が含まれていた可能性は高い（嘉本 2001）。

れていたことになる<sup>7)</sup>。

写真花嫁から戦争花嫁へという流れのなかで、もっとも大きく変化したのは、日本人という人種が同じでも、アメリカ生まれの日系二世はアメリカ国籍をもつという点にある。異なる国籍同士の婚姻と国際結婚を定義するならば、写真花嫁は日本人同士の婚姻、戦争花嫁の場合、日系二世を含む、戦勝国の国籍を有する男性と日本人女性の婚姻ということになる。既に述べたように、これまでの戦争花嫁研究では、日系二世との婚姻の占める割合が高いことが繰り返し言及されてきたにもかかわらず、日系二世と日本人女性の婚姻の研究は不問に付されてきた。なぜなら、異人種間の婚姻である白人、黒人との婚姻よりも同じ人種である日系二世との婚姻はより問題がないとされてきたからだ。

日系人との婚姻をも含めてハワイにおける戦争花嫁とその義理の親族たちの関係について調査したキムラ・ユキコの研究は大変貴重であろう。戦争花嫁たちの結婚満足度は、日系人ではないアメリカ人と結婚した日本人妻がもっとも高く、次に日系人の夫とヨーロッパ人の妻であり、最も結婚満足度が低いのは、日系人と結婚した日本人の妻であった (Kimura, 1957)。同じ人種、同じ文化背景をもつ組合せが、意外にも結婚満足度が低いという結果になった。その要因は、複数あると論じられている。第1に日本人女性側の親がハワイへ移民した日系人に対する偏見が強く、日本人女性が「嫁」となることを望まなかった。さらに、戦後日本の都市部で教育を受けた日本人女性は、日系一世の期待するような「嫁」ではなかったこと。また、消費文化を身につけ、教養もある「嫁」は、ハワイのプランテーションで労働をしてきた一世の、戦前のおもに農村や地方出身の女性とは価値感が異なったことなどがあげられている。残念ながら、キムラと同じパースペクティブで、アメリカ本土の戦争花嫁との比較している研究がない。収容所生活を経験した人が少なく、異人種間婚姻についても寛大な規範をもつハワイでの戦争花嫁の経験が、そのまま本土の戦争花嫁に当てはまるとは考えにくい。

管見によれば、日系二世でも飯沼星光さんのような、いわゆる婦米二世の男性と日本人女性の婚姻へのアプローチを区別して考察したものはない。それゆえに、飯沼信子さんと星光さんのライフ・ヒストリー研究<sup>8)</sup>は、戦争花嫁研究の欠落部分を埋めることが期待できる。

## II. 結婚にいたるまで

### 1. 実践女子大学時代

1932年静岡県沼津市に二男四女の末っ子として生まれた長田信子さんは、実践女子大学家政学部に入學する。帝国婦人協会の会長でもあった初代校長下田歌子は、明治32 (1899) 年に帝

7) 大正10 (1921) 年に発行された岡直樹編纂の『北米の高知縣人』に「市俄古に於ける高知縣人」としてイリノイ州のメトロポリタン・シティであるシカゴには7名の高知縣人がいたことが紹介されている。そのうち一人は白人女性が妻である。

8) 2010年8月30日から同年9月10日までLAのウエストヒルズにある飯沼邸に投宿させていただきながら、聞き取ったライフ・ヒストリー調査に基づいている。

国婦人協会附属実践女学校を設立する。多くの女子大学がそうであるように、戦後の1949年に実践女子大学（国文、英文、家政の3学部）、1951年に実践女子学園短期大学（家政科）を設立した。文部科学省の学校基本調査によると、1955年の大学進学率は、男子が13.1%、女子はわずか2.4%で、女子の短期大学への進学も2.6%である。おそらく信子さんが入学した1951年の女子の大学進学率は、2%前後であったと考えられる<sup>9)</sup>。作家の向田邦子は、1947年大学設立前の実践女子専門学校時代に国文科に入学している。信子さんも、国文に入りたかったそうだが、実学志向の父親のため家政学部に入った。

運命の出会いをもたらす常磐寮（1987年に老朽化のため解体）では7～8人が一部屋であった。その寮に飯沼星光さんが、ルーム・メイトで短大部に在籍していた綾子さんを訪ねてきた。だが、短大部は試験中で寮に綾子さんはいない。一方、四年制大学の本科は試験が終わり、寮にいた信子さんが「オールド・ミス寮の寮監さんに、お客様にお茶を出してさしあげなさい」と言われ、寮の応接室で星光さんの接待をまかされた。綾子さんがなかなか寮へ戻らないため、星光さんから「映画でも見に行きませんか？」と誘われた。門限までに戻ることを条件に許可が下りた。「今でも、なぜあの厳しい寮監さんが許可を出してくれたのか不思議だ」と信子さんは回想する。

女子大の寮に、アメリカ軍の制服を着こなした星光さんは、いやがうえにも目立つ。軍の規則で、外出するときは常に軍服を着用することになっていた。渋谷でどんな映画をみたか覚えていないという。その当時のデート写真（図1）には、皇居の前でドレスアップした信子さんが映っている。その背後に小さくてわかり辛いが制服にキャップをかぶったG・Iの姿が見える。



図1 皇居前ヘデートした飯沼信子さん 星光氏撮影 1952年

星光さんは、綾子さんの兄で同じ日系二世の一郎さんに、日本に行くなら実践女子短期大学にいる妹に手渡してほしいと頼まれ、託ったものを渡しにきたのであった。綾子さんの兄からすれば、婦米同士の星光さんと綾子さんの出会いを作りたかったのではないか。信子さんもこの考えに同意した。だが、信子さんと星光さんが結婚することになる。和歌山県御坊崎出身の婦米二世でもある綾子さんはその後どうなったのか。カルフォルニア米の国宝ローズで有名な国府田農場の甥（この人は婦米ではない）とお見合い結婚したのだそうだ。国府田敬三郎は福島県磐城郡出身である<sup>10)</sup>。

9) 国立社会保障・人口問題研究所ホーム・ページ『人口統計資料集』2011年版より、教育「表11-3 性別高等学校・大学への進学率：1950～2010年」参照。http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/Popular2011.asp?chap=0 2011年3月30日閲覧。

10) 国府田農場のホーム・ページhttp://www.kodafarms.com/ 2010年9月10日閲覧。

日本人の花嫁は、日系一世の親からは歓迎されたと思うと話す。だが、信子さんの場合、婚姻時、星光さんの母親は日本におり、父親はすでに他界していた。アメリカでは飯沼家の「嫁」という立場ではなかった。日系社会のなかでも成功をおさめた人々は子どもたちに、戦略的な結婚をすすめていた可能性もある。国宝ローズで有名な国府田農場の甥とお見合い結婚した婦米二世の綾子さんの例がそれにあてはまるのではないだろうか。

写真花嫁の時代には、先に移民した日本人男性が、同郷の女性と写真を交換した。星光さんは高知出身の日本人移民で、アメリカ生まれの婦米二世である。高知で教育を受けたにもかかわらず、静岡の沼津市出身の信子さんと結婚した。綾子さんも和歌山出身の人ではなく、福島出身の人と結婚した。このように戦前の写真花嫁と戦後の「戦争花嫁」を比較すると、通婚圏が同郷であるかどうかにかかわらずなくなるといえよう。同郷との縁が20年に及んで断ち切られた日系人たちにとって、同郷の「郷」の意味は、出身村や町から拡大し、日本という国へ拡大していったのではないだろうか。

## 2. 「どこの馬の骨」の重要性

1952年長田信子さんは実践女子大学の2年生として在学中であったが、大学の卒業を待たずに翌53年には渡米する。卒業生とは扱われないために実践女子大学との縁が切れているが、母校でいつか講演をしたいと考えている。

最初の出会ってから1年で信子さん21歳、星光さん26歳のとき結婚することになる。1954年のストラウス論文によれば、白人男性と日本人女性の戦争花嫁の婚姻は、最初の出会ってから結婚まで、平均して1年と半年であり、婚姻年齢は夫が24歳、妻のほとんどが21歳で、数人24歳で結婚をしている。さらに、小さな町あるいは都市部出身の日本人女性が多く、親元から離れて暮らしており、親に依存する気持ちのない、精神的に自立した女性が多く、その証左としてアメリカから仕送りの必要な日本人女性はいなかったことがあげられている (Strauss 1954 : 100)。飯沼夫妻はストラウス論文が扱った戦争花嫁の夫婦の平均像に極めて近い。

星光さんが信子さんの父に会うことになった際、「G・Iの制服を着てこないでほしい」と言われたそうだ。父は娘が、派手な服を着てG・Iと腕を組んで闊歩するパンパンガール(米兵相手の日本人売春婦の蔑称)のように米兵に嫁ぐのだというような誤解をされたくなかった。戦前にアメリカに渡った移民の子孫など、貧しいゆえに渡ったという偏見を持っていた父は、どこの馬の骨がわからない男に娘を嫁がせてたまるかと警戒していたようだ。ところが、星光さんの親族は江戸時代の高知城下の地図に居住空間が特定できるほどの家柄であった。「どこの馬の骨どころか、こちらが馬の骨ぐらいなもので」と信子さんは笑う。

星光さんの父の妹が目黒に住んでいて、この田中の叔母さんが信子さんの父に会いに行く。この目黒の田中の叔母さんと父は意気投合した。さらに信子さんの父は、四国から沼津に挨拶にきた星光さんの母と会う。土佐の家老の娘であり、神戸女学院を中退して高知女学校に通った母はとても上品な人であったという。星光さんの父、飯沼直亥はアメリカから高知へ帰ると

女学校の門のそばにたって、一番美人を選んだというエピソードを星光さんはとても楽しそうに話す。その母の母、すなわち星光さんからすれば祖母の鴨下鹿衛は上野の音楽学校に通い、山田耕作とも親交があったという。星光さんの母方祖父は、大阪商船の船長をしていた。飯沼家は二代にわたり、女学校出身、女子大出身の嫁を見つけることに成功している。

一方、星光さんの祖父飯沼基氏は、山内家につかえた武家の飯沼家に養子として入った。明治維新後、基は何を思ったのかキリスト教に帰依し、牧師になった。飯沼家というのは、父方をみても母方をみても西洋に対して開かれている家だったのではないだろうか。飯沼家唯一の男子である父直亥はアメリカで苦勞して薬学をおさめ、直亥の姉妹たちのなかには、東京女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）を卒業後、教員になった女性、1917年（大正6年）に財団法人として創設された理化学研究所に勤めていた女性など才媛ぞろいである。

戦争花嫁の時代になると、自由恋愛による結婚であり、写真花嫁の時代のように、会ったこともない相手との結婚ではないところに大きな差がある。同郷出身者から写真花嫁が選ばれた理由は、身元がわかっているということが花嫁、花婿双方にとって信頼性の担保であったと考えられる。「馬の骨」と謙遜するが、印刷会社を成功させた父親をもつ信子さんの場合も、娘の結婚相手にはそれなりの家柄を重視した。星光さんの父親が後述するようにアメリカで大学を卒業し、薬局を経営して成功を取っていたことも、「貧しい移民」イメージを覆したであろう。一方、星光さんの場合も、信子さんがその当時の女子大に娘を行かせることのできる家庭であったことは結婚へ踏み切る要因であったと思われる。自由恋愛であるにせよ、信子さんも星光さんも、制度的家族の基盤である「家格」にこだわったのではないだろうか。

信子さんは、実践女子大学在学中、当時の大卒サラリーマンの月給が8000円から1万円のところ、1万2千円の仕送りをしてもらっていたという。沼津で印刷所（図2）を営む信子さんの父は、先見の明のある人であった。戦時中は軍部など政府の印刷物を引き受けることとひきかえに、機械を沼津から板妻の兵舎へ「疎開」させた。半年後、沼津が空襲で焼けたときも、機械は無事であった。東京や大阪も空襲で焼け野原になるなか、戦後、すぐに印刷業務に復帰し、沼津一となった。「御殿場出身の父は中学を卒業しているわけではないが、父は偉いと思う」と尊敬している。

信子さんは、二男四女のなかの末っ子である（図3）。長兄喜和氏は、商売を継ぐことが運命づけられていたため沼津の商業高校へ行く。次兄進氏は、兄が印刷所の跡取りになることがわかっていたので、戦前は満洲へ行くことを希望したことがある。だが、胸のレントゲンに白い影があったため、大陸行きは断念せざるを得なかったらしい。長田家は、飯沼家のように教育熱心だったのかと聞くと、違うという。確かに、家業を継がせる男兄弟は商業高校を出ているだけで、大学へは進学していない。だが、娘たちはやりたいことを優先している。信子さんが「行きたい」といえば、父は「うん」というだけだったという。

信子さんよりも一回り上の長女、秀子姉さんが信子さんに与えた影響は大きいと思われる。戦前に日本画を学ぶため、東京は杉並の女子美（女子美術専門学校、現在女子美術大学）へ

通った秀子姉さんは1940年ごろ、8歳の信子さんを東京見物に連れていってくれた。日本橋三越のエレベーターと、上野の博物館でみたミイラが幼い信子さんに強烈な印象を残したようだ。「ふうん。人間って死ぬとこんなふうになるんだ」と8歳の少女は初めて見るミイラを物怖じ一つせず見つめた。「三ツ矢サイダーあげるから」の一言で、信子さんはよく秀子姉さんの日本画のモデルをやらされたという。

次女の千恵子姉さんは体が弱く、結核になったとき、明治29（1896）年神奈川県平塚市に設立した結核療養所に、父は娘を入れる。大部屋ではなく、一軒家の療養所に入れたという。三女の静江姉さんと相談して、千恵子姉さんにテレビを買ってあげようということになり、アメリカから150ドルもの大金を送金している。ちなみに信子さんがアメリカに渡った1953年は、NHKが放送を開始した年であり、テレビの普及率は0.02%である。シャープの国産第一号テレビは、17万5千円であった<sup>11)</sup>。1ドル360円の時代に、大卒サラリーマンの半年分の給料に匹敵する5万4千円の送金である。

1950年ごろ、信子さんの高校の修学旅行は奈良・京都だった。沼津駅につくと日産の後ろに荷台がついている車で兄たちが迎えに来てくれたという。1950年代に、姉妹でテレビ1台を買うぐらい、なんでもない家なのではあろう。三女の静江姉さんは、静岡の薬学専門学校へ行きかけたようだが、父が反対し、ドレスメーカーへ行って洋裁を学ぶことになる。自分が幼くなければ、静江姉さんの薬専行きをサポートできたのにと、信子さんは父を説得できなかったことを今でも悔しがらる。長田家では、娘たちも自己主張できる環境であった。だが、希望の国文ではなく家政など、父が最終決定をし、娘たちはそれに従っている。

この姉妹は「一生サラリーマンの妻じゃねえ」とお互い独身時代に言い合っていた。つまり、彼女たちにとってたんなるサラリーマンの妻になることは憧れではなかった。30人の従業員と2人の女中を抱え、印刷業を切り盛りする長田家は、一般のサラリーマンよりはるかに稼ぎがよかったと思われる。娘たちが結婚した後も、父は新居を娘夫婦のために、自分の家の近くに建設し住ませた。戦時中に信子さんがおねだりをして、天体望遠鏡を買ってもらったというエピソードからもわかるように、何不自由のない生活をしていた。実践女子大学在学中も、よく歌舞伎を見たり、高野フルーツ・パーラーでお茶をしたそう。バナナが風邪をこじらしたときにしか食べられなかった時代にである。

信子さんは、結婚の支度金として父から20万円もらったという。新卒サラリーマンの年収をはるかに上回る額である。洋装などアメリカでの必要なものはすべて東京のデパートでそろえた。そのときあつらえた訪問着は、星光さんのベッド・カヴァーになっている。

結婚式は渋谷の富ヶ谷教会で挙行了。教会での式には、駒込で洋裁店をしていた星光さんの従姉妹にドレスをつくってもらった。そのとき、日系二世のフレッド・クシダさん（帰米で

11) 下川歌史編 家庭総合研究会編 2001『昭和・平成家庭史年表 増補版 1926-2000』河出書房新社。同書によれば、1953年の「大卒の初任給が8000円余のところ、アメリカ製の21インチ白黒テレビ受像機が25万5000円。庶民は街頭テレビに釘付けに」(241頁)とある。

はない)が星光さんのベスト・メン(結婚式の立会人で花婿側の代表)をつとめ、その2~3週間後にクシダさんの結婚式では星光さんがベスト・メンをつとめた。その夫婦はサクラメントでいまも健在だという。東横百貨店の地下でレセプション(披露宴)をした。後にLAで「あなた、渋谷の教会で結婚式あげた飯沼さん?」と声をかけられたそう。その人は信子さんの結婚式のクワイヤー(合唱隊)の一人であったという。40年ぶりに声をかけてきたその人は現在、信子さんの近所に暮らしている。日系二世の兵士と結婚する日本人女性は、よほど印象的だったのであろう。

1953年に、GHQに申請し、アメリカ人配偶者の所属する隊長に挨拶をした。日系二世と日本人ということで祝福してくれ、届出にサインをしてくれた。だが、2年前ぐらいまでは戦争花嫁としてのアメリカ渡航は大変であったという。1947年の日本人花嫁法(公法213)は施行から30日以内に結婚したものが対象になるなど、1952年のマッカラン=ウォルター法の制定までは日本人花嫁の渡米許可は厳しい状態が続いたことを示す。1953年渡米の信子さんは、その点でも困難な目にはあっていない。ただ、軍にとって歓迎されない組合せのカップルに関しては、夫を最前線に送り込むなどされたようだと信子さんはいう。

### 3. 帰米二世の夫

飯沼星光さんの父、直亥氏が1921(大正10)年にサンフランシスコで発行された『北米の高知縣人』に載っている。

飯沼直亥 明治四十年六月の渡米にして間もなく南加に赴き南加大学出身の公認薬剤士として目下桜府に在り昨年十二月一時帰国し去る九月婦人同伴再渡米  
飯沼直亥氏高知市本與力町 妻絹子(旧姓鴨下)土佐郡小高村 1223 Third St., Sacramento, Cal.(『北米の高知縣人』257頁、374頁より)

1907年に渡米して南カリフォルニア大学で薬学を修め、1921年にはサクラメントにいたようだ。父は日露戦争後、徴兵に取られるのが嫌だったことが渡米の理由だと星光さんは語ってくれた。飯沼邸の廊下には、直亥氏の卒業証書と東洋系の男性が9人、大学の卒業式に身につけるガウンに帽子姿で撮影された写真があり、その隣にはカリフォルニア州から1919年に薬剤士としての免許が交付された証書が飾ってある。

1920年に写真花嫁への旅券が発給停止になる。おそらくその事情がわかっていたのであろう。発給停止前に、写真ではなく自ら一時帰国して、妻同伴で再渡米したものと思われる。薬剤士として働くことは、直亥氏自らが往復の旅費を負担し、さらに、妻の渡米費用を工面することを可能にした。日本人移民男性で、写真花嫁の渡航費を出せる人はまだましであり、直亥氏のように日本へ帰国して伴侶を見つけることができたのは、ごく少数に過ぎない。多くはブラケット組と呼ばれ、季節労働者のように農場から農場、土木工場の現場から現場へと渡り歩く

生活をしてきた。それでは、花嫁を迎える貯金も溜まることなく、チャイナ・タウンの南京町で博打と酒に消えていった。

飯沼星光さんは、1926年にLAのリトル・トーキョーで薬局を経営する父飯沼直亥と母絹代の中に長男として生まれた。父直亥、母絹代、母の妹茂子、星光の姉桂子、星光さんが3歳ぐらいであろうか、1930年ごろの写真が残っている（図4）。飯沼家は女系の家系で、大望の男の子であった。クリスチャンである祖父が聖書の一部からとって星光と命名した。まだ星光さんは幼い頃、母とともに日本で教育を受けるために高知へ帰った。その後、一家全員が帰国し、高知のはりまや橋の近くで薬局を営んだ。

幼少期から現在の大阪府立大学の前身である官立大阪工業専門学校機械科に入学するため高知を離れるまで、星光さんは南国土佐の空気で育つ。敗戦後、敷島紡績に就職しようとしたが戦争で工場はつぶれていた。そこで、アメリカへ帰国（二世にとってはアメリカが帰る場所である）し、東京銀行（現在のユニオン・バンク）に勤めた遠縁の兄貴の紹介で、サンフランシスコの土建業をしている金持ちの白人の家でスクール・ボーイをした。紹介してくれた親戚の家から歩いて10分ぐらいのところにあったその家は、コンクリートの5階建てで、3階は客室、4階はパーティができるようになっていた。スクール・ボーイの仕事は朝6時に地下の自分の部屋からご主人のベッド・ルームへゆで卵をもって行くことと、ガレージの車を磨くこと。磨くといっても、現場にいくと車が泥で汚れるのをそれを払う程度だという。クック（料理）をする人は日系人ではないが、掃除のおばさんは日本人であった。ゴールデン・ゲートブリッジの北側にある別荘にも日本人の庭師とおばさんが働いていた。

1949年にカリフォルニア大学バークレー校への合格通知が来た翌日に徴兵にあった。ニュージャージーへ訓練のために行くが、バスはまだ後方に黒人専用の座席が設けられていた時代である。日本人はどこに座ったらいいかと聞いたら、「真ん中に座れば？」と冗談を言われたらしい。トイレも黒人専用と白人専用が別れていたが、日系人は白人と同じトイレを使ったという。そこで、部隊への配属など希望を聞かれた。二世のなかでも日本語を完全に操ることのできる星光さんは、日本語の教官を勧められた。しかし、それでは一生軍隊生活から抜けられないと思い、あえて朝鮮戦争が勃発した極東を希望した。もしかすると、日本へ行けるかもしれないと考えたからだ。

幼い頃、一緒に遊んでいた母方のいとこ半がインテリジェント・オフィス（情報部）にいたので、なんとかしてくれと手紙を書いた。12月に1500人を乗せた船で出発し、かなり船はゆれた。空気が澄んでいて富士山が見えた。日本へ着くなり、自分だけ、朝霞<sup>12)</sup>のキャンプへ送られ、通信部隊に配属された。もしそのまま釜山に送られていたら、部隊ごと全滅していたという。

サンフランシスコでスクール・ボーイの口を紹介してくれたのも、命の恩人も、皆、親戚で

---

12) 埼玉県朝霞市にキャンプ・ドレイク（Camp Drake）があり、アメリカ陸軍第8軍団が駐屯していた。

ある。その親戚の一人に偶然、筆者は会っていたことが判明した。戦争花嫁について著書がある林かおりさんの紹介で、サンフランシスコのThe Japanese American National Library（日米史料館）の主、岡省三氏に面会した。改めてアポイントメントを取り直し会うことになっていた日の朝、岡氏が急逝したという連絡があった。この話をする、それは省三さんだといことになった。岡家は飯沼家と親族であり、社会主義者として警察からマークされていた岡兄弟の兄、繁樹（1878-1959年）氏がシカゴの飯沼夫妻の家に泊まった。早朝、キッチンのテーブルに5ドルを置き、フロリダに取材に行くために繁樹氏は静かに出て行ったエピソードを語ってくれたことから、つながりがわかったのである。ちなみに、飯沼直亥氏が記載されている『北米の高知縣人』は、岡兄弟の直樹氏が編纂している。繁樹、直樹、省三は岡三兄弟である。

岡繁樹は、サンフランシスコに金門印刷所を開き、戦間期においては、インドで日本兵に対する投降のビラを考案し、金門印刷所の印字で印刷した。また、社会主義運動を支援したことも知られる。弟の直樹氏が塩田庄兵衛、藤原彰らと編纂している『祖国を敵として』<sup>13)</sup>がある。第二次世界大戦で、岡繁樹氏が示した行動は祖国日本を敵にしたようにみえるが、日本を愛するがゆえにとった行動であることが表明されている。



図2 静岡県沼津市の飯沼（旧姓長田）  
信子さんの実家兼印刷会社



図3 長田家 母たけ、父与作、長女秀子、長男喜和、  
次男進、次女千恵子、四女信子、三女静江 1936年頃

13) 宮本正男編『日本平和論体系(17) 長谷川テル作品集』（1994年、日本図書センター）に『祖国を敵にして』が収録されている。岡繁樹研究としては、加藤哲郎（2004）「反骨の在米ジャーナリスト岡繁樹の1936年来日と偽装転向」『インテリジェンス』4（20世紀メディア研究所）がある。



図4 星光さんの父飯沼直亥、時計回りに、母絹代、星光、姉桂子、母の妹茂子。LAにて1930年ごろか。



図5 シカゴの中根献二郎で行われたクリスマス・パーティ 1955年ごろ



図6 ロサンゼルスにて 飯沼信子・星光夫妻と長女グレース（直美）、長男アーサー（直）1960年ごろ

### Ⅲ. シカゴ時代

#### 1. 軍用船の中

横浜港からシアトルへ向う軍用船は約2週間かかり、約30名の花嫁がいた。昼間は甲板でハズバンドと一緒にあるいは家族団らんを過ごす。夜は、女性は女性部屋、男性は男性の部屋で就寝した。軍人としての階級によって船室のランクが分かれていた。2～3カップルは黒人と日本人女性のカップル、二世と結婚したのは信子さん一人で、残りは白人との結婚であったという。日系二世との婚姻は、サンフランシスコ講和条約発効前と後では、戦争花嫁全体に占める割合に大きな変化があったとも考えられる。

サージャン（軍曹）のジョンソンは、三沢基地で水商売の女性と知り合う。ヘンリー君という2つになる息子がいた。除隊後は、故郷ミシガンでタクシー・ドライバーになるとのことであった。信子さんは、結婚相手がタクシー・ドライバーなのに、なぜ結婚するのだからと驚いた。

ジョンソンの出身地がミシガン州であったかの記憶は曖昧なようであった。田部俊子は、ミシガン州デトロイト市で、1946から55年の10年間に結婚した90組の戦争花嫁カップルについて調査を行っている。61組は白人、27組は黒人が夫であり、日系人については述べられていない。夫の職業は30%が軍人で、5人は技術者、3人は学生、4人は経営者で4%は失業中であった。残りのものは、工場で不熟練動労者、熟練工、事務員などであった。大半の妻は夫の職業に満足しており、ほとんどのケースにおいて夫も妻も将来に学問を身につける計画は全然なかったと述べている（田部、1962：100-102）。「一生サラリーマンの妻じゃねえ」と、サラリーマンに嫁ぐことすら論外の信子さんにとって、タクシー・ドライバーの妻になることは想像できないほどの「お嬢様」であった。夫が大学に行くことは当然だと信子さんは考えていた。敗戦後、車を買うだけでも大変な日本社会にあって、実家に車があった信子さんがアメリカに適應できたのであろうか。

花嫁たちの出身地は北海道札幌や、東北の米軍基地周辺出身の女性が多かったという。メイン州へ嫁ぐ女性は、水道はなく井戸水であるという。30人も花嫁がいたら、自然とボスができた。28、9歳の言葉遣いの荒い女性で、ハズバンドは年下の22歳ぐらいであったという。素敵なブラウスは、アメリカから送られてきたものらしい。ただ、言葉遣いがいかにも阿婆擦れで、星光さんは、彼女とあまり親しくしてはいけないと信子さんにアドバイスしたほどであった。当時21歳の信子さんは、船の中では最年少の花嫁だった。

#### 2. シカゴの日系社会

『シカゴ日系百年史』の著者でもある伊藤一男氏は1986年に次のように述べている。

シカゴの日系社会を分析すると戦前派一世、帰米二世、日本をあまり知らない純二世、三世らのほかに戦後派一世の集団が共存している。古くは戦後間もなくの難民救済、親族呼寄せなどで当初からアメリカの法令にのっとって移住した人々、いわゆる戦争花嫁として定着した日本人女性、あるいは一般の国際結婚で移住した日本人、さらに学者、研究者、留学生、商社員らで中途に永住ビザを取得して居をここに移したものの、入国ビザに違反してなお住みついているニッポン人など様々である。

これらの戦後派の日本人はシカゴとその周辺に四千人前後居住しているとみられ、このうち戦争花嫁を含む国際結婚組は二千人位だろうという。これらの人々は在来の日系コミュニティとはほとんど交わらずに生きているともいえる。とって全く無縁で生きているのではなく様々なかかわりあいがある。『シカゴ日系百年史』の付録、1986；11-12)

果たして戦後派の移民は、既存の日系コミュニティとは交わらず生きてきたのであろうか。全く無縁で生きているのではないとしたら、どのようなかかわりがあったのであろうか。

前述のストラウスは、彼が所属していたシカゴ大学、ならびに家族研究センターと人種間関係センターの協力のもと、1950年代なかばにシカゴに暮らす30人の白人の夫と、15人の日本人妻、さらに何人かの 'Nisei-war-Bride' (二世戦争花嫁) と 'Negro-war-Bride' (黒人戦争花嫁) にもインタビューしている (Strauss, 1954)。おそらく、これらの表記は二世の日系男性及び黒人男性と結婚した戦争花嫁を指していると思われるが、論文で扱われている大半が白人男性と日本人女性の婚姻であり、その研究課題であるストレスと調和について、白人男性と日本人女性のカップルと、日系二世や黒人男性が配偶者の場合との比較は検討されていない。戦争花嫁のクラブという戦争花嫁のネットワークには言及があるが、日系社会との関係は明確にされない。

また、『シカゴ日系百年史』が出版された1986年ごろ、戦争花嫁を含む国際結婚組が2000人程度とある。しかし、1955年ごろ Chicago Resettlers Committee<sup>14)</sup> は2000から2500人の戦争花嫁がシカゴ地域に暮らしているという見積もりをしている (Schnepp & Yui, 1955；48)<sup>15)</sup>。このように戦争花嫁の正確な人数を掴むことはシカゴだけに限定しても難しい。また、日系移民史においても戦争花嫁や戦後の国際結婚は除外される傾向がある。

14) 1946年8月に発足した。JACLや、Japanese Mutual Aid Society、さらには Chicago Japanese American Councilなどとともに日系コミュニティの再建と収容所から新しくシカゴにくる日系移民の定着を図った。現在はThe Japanese American Service Committee (JASC) と名称を変えている。http://www.jasc-chicago.org/index.html 2010年10月閲覧。

15) 1955年の研究では、セントルイス地域15組とシカゴ地域の5組、計20組にインタビューをしている。しかしながら、シカゴ地域の5組について特に詳細な記述も分析もない。

### 3. 親族ネットワーク・日系人ネットワーク・戦争花嫁ネットワーク

#### 3. 1. 親族ネットワーク

1953年軍用船でシアトルにつくと、星光さんの姉夫婦の暮らすシカゴに向う。星光さんとその姉もアメリカ生まれではあるが、一家が日本へ移住したため日本で育った。姉はその後、高知出身の移民男性に嫁いだ。信子さんからするとシカゴの義理の姉夫婦は、比較的大きな家を借りていた。そこで家賃を姉夫婦と折半しながらアメリカ生活をスタートさせることができた。この義理のお姉さんは大変よくしてくれたと信子さんはいう。

戦争花嫁の時代、日系二世と結婚した日本人花嫁のなかには、アメリカへ一世として海を渡った舅、写真花嫁として渡米したであろう姑がいた。さらに、夫の兄弟姉妹がいる。その親族ネットワークをどう生かしたのか、今後の研究の余地がある。

#### 3. 2. 日系人ネットワーク

1922年の外務省が行った調査によれば、シカゴの在留邦人数は1945名であった（『シカゴ日系百年史』；117）。真珠湾攻撃の後、フランクリン・ルーズベルト大統領によって署名された1942年2月の大統領行政命令9066により、日系人が強制収容所へ幽閉される。ところが、戦争が進展するにつれ、収容キャンプで日系人を徒食させているという批難が高まり、1943年5月には、収容所からの出所を許した。戦時中、多くの黒人が、労働力不足解消のためにシカゴへ移動させられたように、日系人の収容所から何人かシカゴへ移住している。そのなかに、ムーディ日本人基督教会の葛原定一、千秋親子がいた。葛原千秋牧師にはお世話になったと信子さんは懐かしがる。飯沼夫妻が新天地シカゴにおいて、親族ネットワークと、戦前からあった日系人社会、さらには、領事館に勤務していた方の善意により戦争花嫁のネットワークという構造の中で定着していった。

夫星光さんはメソジスト派のクリスチャンであるが、初代北米ホーリネス教会監督の葛原定市の息子、葛原千秋牧師が中心となったシカゴのホーリネス教会へ日曜日には通った。そこでは、日系移民の一世、二世が日曜学校を運営し、英語と日本語で授業が行われたという。シカゴのレークサイド教会のホーム・ページには、アマチと呼ばれていたコロラドにあるグラナダ強制収容所から1943年に葛原定市が移住し、布教活動をしたことが紹介されている<sup>16)</sup>。写真花嫁も、宗教の違いこそあれ、信心深い人が多い。幾多の苦難を乗り越えるための精神的支柱だけでなく、コミュニティやネットワークを維持していくにも教会や寺が重要な役割を果たしていた。

1954年と翌55年に、長女（直美、グレース）、長男（直、アーサー）をもうけた。お産は日

16) Lakeside Church of Chicagoのホーム・ページ参照。

<http://www.lakesidechurchofchicago.org/japanese-speaking-division/>（2011年3月3日アクセス）

なお、北米ホーリネス教団の歴史については、オレンジ郡キリスト教会杉村宰牧師が執筆しておられる「東洋宣教会・北米ホーリネス教団の歴史」（ホーリネス教団機関紙『靈聲れいせい』）シリーズを参考にした。北米ホーリネス教団ホーム・ページ<http://www.omsholiness.org/japanese/reisei/index.cgi>（2011年3月3日アクセス）

本語のできる日系二世の井上というお医者さんにみてもらっていたので、困ることはなかった。

### 3. 3. 戦争花嫁ネットワーク

クリスマス・パーティは、シカゴの日本領事館に勤務されていた中根猷二郎で盛大に行われた(図5)。シカゴでは、戦争花嫁を含む新移民は、戦前から来ていた移民とのつながりはほとんどなく、孤立しないようにと中根夫妻はコスモクラブを立ち上げた。安富成良がシアトルでインタビューしている日系二世に嫁いだ「戦争花嫁」は、「戦争花嫁、という頭が日系人会の人たちにはあったような気がします。あの頃は領事館の方を招待してもらっていませんでしたよ。日系の一世の方、二世の方には戦争花嫁に対する偏見がありました。今は随分変わったと思いますよ」(安富、2010:25)と述べている。日本のマスメディアが作り出した、パンパン、オンリーと呼ばれた売春婦、イコール戦争花嫁という偏見が濃厚であった時代、日系人からの差別のほうが、非日系から受ける差別よりも大きかったことを安富は指摘している。古くから日系社会が築かれていたシアトルでは、日本の領事館の人ですら、「戦争花嫁」とのかかわりを避けていたことがわかる。日系社会がどのように、当該地域で形成されてきたかで、日系社会と戦後の「国際結婚」をした日本人女性とのかかわりは、異なったものであった可能性があるといえよう。

中根氏は、日本人移民にアメリカの市民権が取れるように帰化講座の講師も勤めている。前述の『シカゴ日系百年史』に掲載されている写真に、中根猷二氏と日本人女性およそ30人の写真が「晴れて米国市民に。帰化講座の講師中根猷二氏とともに合格者一同。1954年に撮影。」というキャプションとともに掲載されている。戦争花嫁だけでなく、一世で帰化できなかった人々も含まれるのであろう。ご年配の女性、男性も含まれている。中根夫妻はこのように、シカゴにきた日本人女性花嫁たちのアメリカ社会への適応と相互扶助のネットワーク形成には欠かせない人物であった。おそらく、強制収用所から解放された日系人が新天地を求めてシカゴへ流入してきたが、その新旧の橋渡しも中根氏はしていたのではないだろうか。後述するように信子さんは余裕がなかったシカゴ時代ではなく、経済的にも時間的にも余裕ができたLAで帰化している。

中根夫妻がシカゴへきた日本人花嫁を迎えて互いに親睦をはかったという慈善活動コスモクラブの写真(図5)をみてみよう。左側後方の壁の前に立っている男女が中根夫妻である。総勢20人ぐらいの女性がいる。平均年齢、27、8歳ぐらいではないかと信子さんはいう。そのなかで、やはり20歳そこそこの信子さんは最年少である。皆、着飾っている。化粧が濃く派手な衣装の女性たちは、日本では水商売をやっていた人だそうだ。黒人兵と結婚した日本人女性が、2、3人いたが、その人たちは幸せだったという。パーティが終るころには、夫が車で迎えに来てくれて、夫の両親もよくして下さるとのことであった。

「ここに、来られる人は、ましなのよ」と信子さんはいう。「ここに来られない人」も大勢いたということだ。「ここに来られる人」たちの出身地も多様であった。「血筋がしっかりして

いるのは、この人だけ」と指差した女性は、父親が外交官で結婚前から英語ができたようだ。二世と結婚した人も数人いる。家具で成功した二世と結婚した人。シカゴで不動産をした二世と結婚した人は、信子さんより、7、8歳年上であったがとてかわいがってもらったという。離婚、再婚を2回した女性もいた。日系二世と結婚した花嫁の数は、さほど多くない。

飯沼夫妻は、戦争花嫁たちのアメリカ社会適応をうながした中根夫妻を中心とするネットワークと、日系社会、さらには、日系のクリスチャンのネットワークのなかにあった。このコスモクラブのおかげで、義理の姉夫婦の家から、家の目の前に託児所（ナーサリー）がある日系人が多く暮らすアパートに引っ越すことができた。その建物のオーナーは日本人であった。カトリック系のロヨラ大学の近くで、ミシガン湖が東に位置する。さらには、大学に通う星光さんを支えるため、子どもが生まれるとすぐ託児所に預け、日系二世が経営する印刷工場に信子さんはアルバイトの職を得る。

#### 4. 最低賃金の仕事と基盤づくりという希望

「よほど、印刷関係には縁があるのね」というアルバイト先の印刷工場で製本作業をした。託児所の近くの家は、ロヨラ大学の近くであったが、印刷所は、シカゴの南の黒人が多く住む地域にあったため、怖かったそうだ。ハワイの二世が5人ぐらいいて、作業は日本語で教えてくれた。とても親切にしてくれたという。夜のシフトは人数が少なく、5～6人ぐらいいだという。真夜中の12時になると、車で星光さんが迎えにきてくれた。

信子さんの時給は、「忘れもしない、当時の最低賃金の1ドル25セント！」であったと鮮明に記憶している<sup>17)</sup>。信子さんは朝、星光さんを大学へ送りだすと託児所に子どもを預ける。託児所は朝の7時ごろから夕方6時ごろまで預かってくれたのだそうだ。午後、大学から帰宅する星光さんは子どもを迎えに行く。子どもたちに食事を食べさせ、お風呂にいれ、寝かしつけるのも星光さんである。一方、信子さんは、子どもと夫がいない間に家事全般をこなす。信子さんを車で星光さんがアルバイト先の印刷所へ送り、そこで16時から24時の7時間働く。週5日で、週43ドル75セントになる。星光さんは、従軍していたためG・Iローンが月160ドルある。だが、月60ドルの家賃を支払い、学費やら、本代などを支払うと手元には残らない。信子さんの稼ぎは、ほとんど生活費に消えた。

シカゴ時代が一番苦しかったという。何が苦しかったのかを聞くと、「経済的に」と即答がかえってくる。つまり、異文化適応に戸惑ったり、郷愁など、日々の生活に追われるなかで感じる暇もなかったということだ。5ドルの映画に行かなかったエピソードは、基盤づくりという目標に向かって生活することへの「希望」が、彼女を支えていたことを物語る。

17) アメリカ労働省のホーム・ページによると、連邦最低賃金制度は、1938年のFLSA (Fair Labor Standards Act of 1938)、すなわち公正労働基準法に基づいて導入された。38年の最低賃金は時給25セントであったが、その後、幾度も改正されている。1956年に1ドルとなった。信子さんの時給はほぼ連邦最低賃金に近いが、シカゴという土地柄と夜のシフトであることを考えれば、25セント高いのも妥当であろう。www.bls.gov/opub/mlr/1987/06/art4full.pdf Smith, R.E. and Vavricheck B, 1987, "The Minimum Wage: Its Relation to Incomes and Poverty"

映画「君の名は」が、シカゴで上映されることになった。アパートに暮らす日系や日本人の友人から誘われた。夫も、「行けば？」と言ってくれたが、行きたいとは思わなかったという。映画が5ドルであったかはともかく、このエピソードで、強調されることは、なんとしても夫にエンジニアとしてのディグリー（学士の資格）を取って、安定した職業についてほしいという「希望」のために頑張ったのだということにある。

大学を中退している信子さんには、アメリカの大学を夫に卒業してもらうことこそが、その後の安定した生活につながるという見通しがあった。しかも、大卒であるかが重要だという体験を星光さんはする。星光さんは、9月入学に間に合わなかったので、1月にイリノイ州立大学へ入学している。その間シカゴのモートルローラーというテレビを作る会社でアルバイトをした。その会社のエレベーターが人種ではなく、ホワイト・カラーか、ブルー・カラーかで分けられていたことにショックを受けた。軍隊では人種で差別されることを味わった。会社では「色」ではない「カラー」で差別されることを知ったのである。

星光さんはわずか3年余で多くの単位を取得し、卒業をしている。日本での生活が長かった星光さんに、すべて英語での大学の授業は難しくなかったのかと質問すると、「別に。数学なんて、英語、関係ないから」と涼しい顔をする。おそらく日本での数学の水準は戦前でも高かったのであろう。英字新聞にも、日本語の新聞にも目を通す星光さんは、完璧なバイリンガルである。

では、当時珍しい女子大生であった信子さんはさぞ英語は得意であったろうと質問すると「全然！ 英語なんか大嫌い！」という。日系社会の中に組み込まれた信子さんは、アルバイト先の印刷工場でも日本語で会話していたそうだ。

信子さんは、誇り高き人である。もっと稼げる仕事はなかったのかと水をむけてみた。家政婦ができるなら、いいほうなのだという。おそらくこれは英語ができることが条件であったであろう。ウエイトレスの仕事も、チップをもらえるぶん稼ぎはよくなる。だが、その当時ウエイトレスは、水商売に限りなく近い仕事であるとみなされていたようだ。誘われたがそんな仕事はできないとことわった。最低賃金に近い1ドル25セントに誇りをもって働いていたことがわかる。

サンフランシスコのベイ・エリアに居住する日本人女性移民の3つの世代、すなわち、一世、二世、戦争花嫁を、家事労働という視点から分析したアメリカの日系二世の社会学者エヴァリン・グレン・ナカノ（Glen Nakano, 1986）は、一世の女性が白人家庭にメイドとして働くことができた場合、二世である娘もメイドをする可能性が高いことを示唆している<sup>18)</sup>。一世たち

18) ナカノは、表3「1940年における4つのシティにおける二世と一世女性の家事労働業」のなかで、強制収容所に日系人が入れられていない1940年のサンフランシスコでは、実に労働市場にある日系女性のうち、一世は50.4%が、二世では56.7%が家事労働業に従事していることを示している。戦後になると、表8では、アメリカ生まれの日本人女性がプライベートな家事労働業についている割合は一世を含む45歳から64歳コーホートでは、12.7%、主に二世の35歳から44歳では、6.6%、さらに若い25から34歳では、2.3%へと日系人の家事労働従事者が減っていることがわかる。しかし、同じ1960年に20歳から35歳までの戦争花嫁が主流をしめると外国生まれの日本人女性がプライベートな家事労働業についている割合は7.7%にとどまる（Glenn Nakano, 1986）。

は、娘や息子に教育熱心で、日系二世は学歴もあるが、人種とさらに女性の場合はジェンダーという二重のマイノリティ構造により、「女性の仕事」とされる職業につく傾向がある。ただし、G・ナカノの日系二世女性インフォーマントは19人で、帰米7人を含んでいるが、1901年生まれから1937年生まれという四半世紀の幅があり、日本の敗戦当時40代半ばからまだ十代に達しない女性の二世が含まれる。7名の帰米のうち4名は帰米男性と婚姻しているが、戦争花嫁の配偶者に帰米二世の男性が含まれていたか明確にはされていない。帰米の男性と結婚した4人のうち1人は一世の帰米男性と結婚している。12人の戦争花嫁のインフォーマントは1930年生まれから1944年生まれと15年の幅であることを考慮すると、二世研究は出生コーホートによって大きくことなることは十分に留意すべきであろう。

G・ナカノは、帰米はアメリカ文化への適応は低く、ブルーカラーの仕事につきやすく、帰米ではない二世はホワイト・カラーの仕事を得ると述べている。飯沼星光さんの場合、幼少期から長期間に日本に暮らしていても、アメリカに帰国後、大学を出てホワイト・カラーになっている。G・ナカノの研究について、信子さんに意見をきくと、「偏見でみてはだめ。事実をみないと。帰米だって優秀な人は多い。」とのことであった。

G・ナカノは都市部から渡米してきた戦争花嫁は、学歴があるにもかかわらず、その学歴に見合った仕事に移動後は就職できなかつたり、夫の階級が、自分の父親の階級よりも下がる傾向があることに着眼している。「矛盾した階級移動」(パレーニャス)として知られるこの現象に、信子さんもあてはまるといえよう。だが、それは夫の社会的階級を確保し、よりよい基盤をつくるためには、目先の5ドルに「甘んじない」姿勢を貫いただけである。実践女子大学時代は、サラリーマンの月給以上の仕送りをうけていた信子さんが、最低賃金に近い時給1ドル25セントの仕事に、みじめさを感じたことはないのかと聞くと、「目先のお金で、だんなさんたちは植工ですよ、ブルーカラーで。そんなのに甘んじてはいないよ、私はと思って。ハズバンドが大学をきちんと出て、ちゃんとした基盤をもつため。(映画に行けることを)なんにも羨ましいことはなかった」ときっぱりと言い切った。

軍用船に乗り込む際、横浜の埠頭で信子さんの父は娘に「標準に甘んじることなく、その水準を超えることを目指しなさい」と饒の言葉を述べた。娘は、異国の地で、標準以上を目指すための努力を惜しまなかった。尊敬する父は、1955年長男が生まれた後に、肺がんで亡くなった。信子さんがアメリカに来て3年目のことであった。

## Ⅳ. ロサンゼルス時代

### 1. 標準以上の生活とホームシック

イリノイ州立大学から転校し、イリノイ工科大学で電気工学を学んで星光さんは卒業した。ノースロップ社に履歴書(CV)を出したことを星光さんのいところが知っていた。飯沼家の親族ネットワークの、社会的階級の高さは特筆すべきだろう。当時、エンジニアはまさに金の卵

でひっぱりだこ状態であったという。1958年にシカゴから西海岸ロサンゼルスに現在も日系人が多く暮らすガーディナーへ引っ越すが、その料金までノースロップ社が出してくれたのだそう。プリマスという青い中古車を600ドルで買って、シカゴからLAまでを結ぶアメリカの大動脈ヒストリック・ルート66を、4日間星光さんが運転した。ガーディナーからハイ・ウェイにさしかかる付近を車で走ると、星光さんは「ここは昔おばが住んでいたところ、湿地だったねえ」という。マルカイという大きな日系のスーパーにはほとんど日本のスーパーと変わらない品揃えであった。

ノースロップ社は、現在、ノースロップ・グラマン社となっているが、ステルス戦略爆撃機B-2初飛行から20周年を迎えたアメリカの防衛関連産業の雄である。星光さんは1977年ごろUCLAの大学院で修士号をとっている。エンジニアリングを専攻し、会社がお金を工面してくれた。授業料は70ドルであったという。その後も、アメリカの航空機会社や軍需関係のエレクトロニクス企業で活躍した。つまり、星光さんは「ただのサラリーマン」ではなく、高給取りになったのである。さらに、LAのウエストコースト大学では、週2回、数学の助教授を務めるなど、地域貢献も重ねてきた。

一方、信子さんは、LAで日本の商工会議所が開く1クラス40人の帰化学校へ通った後、1959年にアメリカへ帰化し、運転免許も取得した。子どもは優秀（図6）で、英語に困ることもなく、学校から呼び出されることもなかったという。

ホームシックにかからなかったのだろうか。高知新聞に1984年4月からほぼ月1回ペースで信子さんが連載した「ロスの日系家庭から」が、『アメリカぐらし 照る日・曇る日』（淡交社、1987年）として単行本になっている。84年はロサンジェルスでオリンピックが開催された年でもある。85年5月に書かれた文章のなかに「私も確かに、渡米後七、八年のころには、ホームシックに悩まされ、どんなにか日本へ帰りたかったか。その間に父も亡くなり姉も亡くなって、いやがうえにも望郷の念はつのった」（飯沼、1987：88）とある。亡くなったのは、結核にかかっていた次女の千恵子姉さんである。シカゴ時代は、生活に追われていた信子さんも、LAで父が望んだように標準以上の生活が手に入り、子どもたちが小学校へ通いだし、自らも米国市民になったころ、ホームシックに悩まされたことになる。そんな信子さんが日本へ18年ぶりに帰国したのは大阪万国博覧会の翌年であった。

アメリカ生まれの星光さんにはホームシックはないのだろうか。朝、ひっきりなしに電話がかかってくる。星光さんは電話の音を聞きながら「僕じゃない。僕、あまり友達いないから。」とポツネンという。会社の元同僚とは会わないのかと聞くと。「たまに、ゴルフしに行くよ。でも、親しいのは皆アルメニア出身のひとたちだけだね。」と答えた。信子さんによると、会社で夫は、白人の尊敬を得ていたと思うという。反面、あまり強く主張しない星光さんにイライラするという。収容所に入れられた日系二世たちは「シカタガナイ」「ガマン」という言葉を親たちから言われ、育ってきた。星光さんは収容所に入れられたわけではないが、その謙虚さは、日系二世特有のものかもしれない。幼少期から高校までを高知で過ごした星光さんに

とって、胸襟を開いて話せる友達は、皆高知ににいるという。日本を訪問する度、高知では星光さんを中心に同窓会が開かれているようであった。

戦間期を生き抜いた人というのは、運もあるが、生命力がある。飯沼家の朝はしっかり食べる。日替わりでベーグルや、フレンチ・トースト、お野菜、ベーコン、卵がつく。卵料理を信子さんは好きではないので、「あんたも、いる？」と、卵好きの星光さんが作ってくださる。茶碗洗いも、ゴミ捨ても、たんたんとこなす。星光さんの家庭菜園から胡瓜や茄子、トマトが食卓をかざる。家庭菜園を荒らす小動物が、罠にかかっているかどうかを見るのが、朝の日課だ。罠にかかったリスをスーパーの駐車場で放してやっていた。信子さんのうんざり顔をよそに、星光さんはお昼に「ハンバーガー食べたい！ あんたも、食べるじゃろ？」と筆者を誘う。ハンバーガーショップに行く道すがら、ヒスパニック系の女性がベビー・カーを押し、幼い子どもの手を引いていた。星光さんは、ヒスパニック系の移民たちは子沢山であることを教えてくれた。かつて写真花嫁も子沢山だと見られていたが、戦争花嫁の時代になると、子どもの数は、それほど多く産んでいない。かつてガーデニングは日系人の仕事の一つであったが、現在はヒスパニック系がしているとのことだ。

謙虚でも星光さんは日系婦米二世の出世頭である。1984年から南加高知県人会の会長に度々選出されるなど、カリフォルニアの日系人社会とのつながりは深く人望も厚い。2010年はNHKの大河ドラマで「龍馬伝」を放映していた。LA龍馬会の会長の星光さんは、ドラマの時間になると信子さんと、「どうして龍馬がこの人（主役の福山雅治）なのかねえ」などといいながら見ていた。

イラストレーター角谷やすひと氏による龍馬のイラスト展を西本願寺LA別院で開く段取りなど、夫婦して出かけることが多い。日本人の同年代に比べると、社交性は高く、交際範囲も広い。飯沼家は夫妻を慕って日本人留学生も遊びに来る。また、裏千家のお茶を自宅の茶室で教室を開いている信子さんには、日本人だけでなくユダヤ系アメリカ人も熱心にお稽古に来ている。夏であったので、全員浴衣姿で、お手前を披露してくれた。飯沼夫妻のために、わざわざマグロを届けてくださった日本人女性は、大連生まれだという。日系人ネットワーク、県人会ネットワークとのつながりがあり、孫のリサさんとはボーイフレンドぐるみで食事をする。だが、シカゴのような戦争花嫁ネットワークには属していない。日本とのネットワークの中で、年に何回か日本を訪れるが、帰る場所は、アメリカである。

## 2. 『二つの祖国』—執筆活動のきっかけ

1984年のLAオリンピックの前後に高知新聞に「ロスの日系家庭から」を執筆することになるが、その連載のきっかけは、山崎豊子の作品『二つの祖国』（単行本として1983年に新潮社から出版。1984年、NHK大河ドラマ『山河燃ゆ』としてドラマ化された。）に対するアメリカ日系社会の反応を伝えたかったからだという。日系婦米二世でLAの日本語新聞社の記者・天羽賢治を主人公に、太平洋戦争によって日米二つの祖国の間でゆれる悲劇を描いた作品である。

信子さんによれば、日系人に二つも祖国はない。祖国はアメリカなのだという。

信さんは、その後、本を出版してくれた淡交社の副社長臼井史朗氏の紹介で1990年に日本ペンクラブへ入る。そこで、作家早乙女貢氏に「野口英世の妻はあばずれだったっていうじゃない？ 飯沼さんアメリカにいるんだったらやってみたら？」といわれ、そんなはずはないと野口英世の妻の研究に没頭するようになる。全米を自費で飛び回り、完成させたのが『野口英世の妻』（新人物往来社、1992年）であった。野口英世のお墓参りをしたとき、高峰譲吉の立派なお墓を見て、次は高峰譲吉研究に邁進し、翌年には『高峰譲吉とその妻』（新人物往来社、1993年）を出版する。信さんが新婚時代を過ごしたシカゴは、高峰ゆかりの地でもある。

文字通り全米を西に東に北にと奔走している。子どもも夫も信さんのやりたいことに何も反対はしない。信さんはふと「日本で日本人と結婚していたら、こうはなってないと思うよ」という。どうなっていたと思うかをたずねると従順な普通の主婦になっていたのではという。向田邦子のように出版社に勤めたということも、山崎豊子のように新聞記者の経験があるわけではない。しかも、執筆活動の開始は50歳を過ぎてからであり、主な作品は60代、70代に集中している。

行きたかった国文をあきらめ、実践女子大学在学中に星光さんと知り合い海を渡った信さんは、いったい、いつどこで玄人肌の文章を書く素養が身についたのであろうか。小学校の時分、「石田に行った事」というタイトルの信さんの綴り方（現在の作文）は、静岡県東部地区で入賞をした。高校時代には当時の文部省の役人が授業参観に来た際、作文を朗読させられたそうだ。信さんの文章には人を惹きつけるものがあつたに違いない。また、印刷業を営む父は、信さんが父宛に書いた手紙に添削をして、すなわち朱入れをして返してきたそうだ。父が読んでいた文芸春秋を手にとって「いつか、こんな雑誌に文章が掲載されたらいいなあ」と夢みた少女時代であったが、それは正夢になった。

標準以上に稼ぐ夫と夫の理解、標準以上の好奇心と行動力がなければ、ノンフィクション作家飯沼信子は誕生しない。2006年には旭日単光章を叙勲した。

## おわりに

高峰譲吉を筆者の友人であり俳優である仲間保主演で舞台化された2008年、新宿の紀伊國屋ホールで飯沼信子さんに初めてご挨拶をした。その後、来日される度にラポール関係を築き、ご自身についても書いて欲しいと打診したが、信子さん自身の書きたいものが優先される。そこで筆者がライフ・ヒストリーを聞き、書くことになった。高峰譲吉が取り結んでくれた縁に違いない。

婦米二世と結婚をし、1953年に渡米した飯沼信子さんのライフ・ヒストリーから、性急な結論を導き出すことが目的ではない。婦米二世との婚姻についてあまりにも先行研究が少なすぎるからだ。あくまでも、一つのケースとして今後の研究の比較の対象となることを願ってやま

ない。

## 付記

本研究は、京都女子大学より平成22年度研究経費助成（研究代表者嘉本伊都子〈「戦争花嫁」のライフ・ヒストリー研究—飯沼信子を通して—〉）を受け、2010年8月30日から同年9月10日まで飯沼邸に投宿させて頂きながら、聞き取り調査を行った。その成果は、2010年10月30日に開催した現代社会学部公開講座「なぜ花嫁は海を渡るのか～日米間の〈越境結婚〉を通して」で一般市民にもフィード・バックをしている。

飯沼ご夫妻に感謝の意を表します。ありがとうございました。

## 参考文献

- Crawford, Miki Ward, Hayashi Kaori, and Suenaga Shizuko (2010) *Japanese War Brides in America: An Oral History*, Praeger Publishers
- Glenn Nakano, Evelyn (1986), *Issei, Nisei, War Bride: Three Generations of Japanese American in Domestic Service*. Temple University Press
- Glenn Nakano, Evelyn (1992) "From Servitude to Service Work: The Historical Continuities of Women's Paid and Unpaid Reproductive Labor", *Signs: Journal of Women in Culture and Society*, 18(1) University of Chicago Press, pp. 1 - 44
- Ichioka, Yuji (1988=1992) *The Issei: The World of the First Generation Japanese Immigrant, 1885 - 1924*, Free Press (富田虎男、衆井輝子、篠田佐多江訳『一世—黎明期アメリカ移民の物語り』刀水書房 1992年)
- Kimura, Yukiko (1957) "War Brides in Hawaii and Their in-laws", *The American journal of sociology*, 63(1), University of Chicago Press, pp. 70 - 76
- Lark, Regina F., (1999) *They Challenged Two Nations: Marriages between Japanese Women and American GIs, 1945 to the Present*, Ph.D. diss., University of Southern California
- Schnepf, Gerald J. and Yui, Agenes Masako (1955) "Cultural and Marital Adjustment of Japanese War Brides", *The American Journal of Sociology*, 61, pp. 48 - 50
- Steiner, J. F. (1917) *The Japanese Invasion: A Study in the Psychology of Inter-Racial Contacts*, A. C. McClurg, (森岡清美訳『人種接触の社会心理学—日本人移民をめぐる』ハーベスト社、2006年)
- Strauss, Anselm. L., (1954) "Strain and Harmony in American-Japanese War Bride Marriages", *Marriage and Family Living*, pp. 99 - 106
- Wagatsuma, Hiroshi (1973) "Some Problems of Interracial Marriage for the Japanese", Stuart, Irving R. and Abt, Lawrence Edwin, *Interracial Marriage: Expectations and Realities*, Grossman, pp. 249 - 264
- 飯沼信子 (1987) 『アメリカぐらし 照る日・曇る日』淡交社
- 飯沼信子 (1992) 『野口英世の妻』新人物往来社
- 飯沼信子 (1993) 『高峰譲吉とその妻』新人物往来社
- 飯沼信子 (1996) 『黄金のくさび—海を渡ったラストプリンス松平忠厚《上田藩主の弟》』郷土出版社
- 飯沼信子 (2000) 『彫塑家・川村吾蔵の生涯』舞字社 (星雲社)
- 飯沼信子 (2003) 『長井長義とテレゼー—日本薬学の開祖』日本薬学会
- 飯沼信子 (2007) 『野口英世とメリー・ダージェス—明治・大正偉人たちの国際結婚』水曜社
- 飯野正子 (2000) 『もう一つの日米関係史』有斐閣
- 伊藤一男 (1973) 「問題をなげかけた写真結婚」『北米百年桜』(復刻版) 242 - 259頁
- 伊藤一男 (1984) 「海を渡った日本娘子軍あわれ」『北米百年桜 (三)』(復刻版) 887 - 900頁

- 伊藤一男 (1984) 「写真結婚花嫁の船中日記」『北米百年桜 (四)』(復刻版) 15-24頁
- 伊藤一男 (1986) 『シカゴ日系百年史』シカゴ日系人会、PMC出版
- 植木武 (2002) 『「戦争花嫁」五十年を語る 草の根の親善大使』勉誠出版
- 岡直樹編纂 (1921) 『北米の高知縣人』萬辨舎 (桑港) (奥泉栄三郎監修『初期在北米日本人の記録 北米編 36』文生書院、2008年に収録)
- 岡直樹、塩田庄兵衛、藤原彰編 (1965) 『祖国を敵として：一在米日本人の反戦運動』(家永三郎責任編集『日本平和論大系』17 日本図書センター、1994年に収録)
- 折原淳一 (2001) 「『帰化不能外国人』と日本人移民：『日本人の同化』問題をめぐって」『千葉大学社会文化科学研究』5、115-125頁
- 加藤哲郎 (2004) 「反骨の在米ジャーナリスト岡繁樹の1936年来日と偽装転向」『インテリジェンス』4 (20世紀メディア研究所)
- 嘉本伊都子 (2001) 『国際結婚の誕生—(文明国日本)への道』新曜社
- 工藤美代子 (1983) 『写婚妻 花嫁は一枚の見合い写真を手に海を渡っていった』ドメス出版
- 糸井輝子 (1993) 「1930年代の婦米運動」『移住研究』30
- 糸井輝子 (1995) 『外国人をめぐる社会史：近代アメリカと日本人移民』雄山閣出版
- 糸井輝子 (1998) 「国民の創生：在米日本人移民の二世教育と米化運動」『白百合女子大学研究紀要』34、119-144頁
- 河野利佳子 (2005) 「婦米 (婦米二世) のアメリカでの生活：1930年代を中心に考察」『Ferris Wheel』8、68-82頁
- 河野利佳子 (2006) 「婦米二世像の変遷：戦前期から戦時期までの考察」『Ferris Wheel』9、39-53頁
- 坂口満宏 (2001) 『日本人アメリカ移民史』不二出版
- 坂口満宏 (2002) 「ネットワークでつながる日本人移民社会」ベフ、ハルミ編著 『日系アメリカ人の歩みと現在』人文書院 38-68頁
- 島田法子編著 (2009) 『写真花嫁・戦争花嫁のたどった道 女性移民史の発掘』明石書店
- 下川耿史編 家庭総合研究会編 (2001) 『昭和・平成家庭史年表 増補版 1926-2000』河出書房新社
- 竹下修子 (2000) 『国際結婚の社会学』学文社
- 田中景 (2002) 「20世紀初頭の日本・カリフォルニア『写真花嫁』修業—日本人移民女性のジェンダーとクラス形成」『社会科学』(同志社大学人文科学研究所) 68、303-334頁
- 田中景 (2004) 「女性の市民的役割と『写真結婚問題』」『社会科学』(同志社大学人文科学研究所) 72、149-171頁
- 田中景 (2006) 「『写真花嫁』の写真：移民の可視化と移民政策の実行についての考察」『県立新潟女子短期大学研究紀要』(人文・社会科学編) 43、261-270頁
- 田部俊子 (1962) 「日本人の戦争花嫁の問題」『北星論集』北星学園大学紀要 1、95-122頁
- 土屋智子 (2006) 「ハワイへ渡った戦争花嫁—日米の戦後政治の狭間で形成されたイメージと実際の経験」『移民研究年報』12、155-16頁
- 新田文輝 (1997) 「海を渡った日本人女性—戦争花嫁再考」『吉備国際大学社会学部研究紀要』7、165-175頁
- 新田文輝 (2001) 「戦争花嫁のライフ・ヒストリー—質的 sociology のアプローチから」『吉備国際大学社会学部研究紀要』11、21-30頁
- 林かおり、田村恵子、高津文美子 (2002) 『戦争花嫁 国境を越えた女たちの半世紀』芙蓉書房出版
- 林かおり (2005) 『私は戦争花嫁です アメリカとオーストラリアで生きる日系国際結婚親睦会の女たち』北國新聞社
- 真壁知子 (1983) 『写真婚の妻たち カナダ移民の女性史』未来社
- 増淵留美子 (1986) 「1910年代の排日と『写真結婚』」戸上宗賢編 『ジャパニーズ・アメリカン (竜谷大学社会科学叢書) 移住から自立への歩み』ミネルヴァ書房
- 村川庸子 (1987) 『アメリカの風が吹いた村—打瀬船物語』愛媛県文化振興財団
- 安武留美 (2000) 「北カリフォルニア日本人移民社会の日米教会婦人たち—日系一世女性のイメージを再考す

- る一」『キリスト教社会問題研究』49
- 安富成良（2000）「『戦争花嫁』と日系コミュニティ(I)―ステレオタイプに基づく排斥から受容へ―」『嘉悦大学研究論集』43(2)、177-199頁
- 安富成良（2001）「『戦争花嫁』と日系コミュニティ(II)―ステレオタイプに基づく排斥から受容へ―」『嘉悦大学研究論集』44(1)、45-61頁
- 安富成良（2002）「『戦争花嫁』と日系コミュニティ(III)―ステレオタイプに基づく排斥から受容へ―」『嘉悦大学研究論集』44(2)、55-82頁
- 安富成良（2003）「日本人花嫁法（1947年）と日系社会」『嘉悦大学研究論集（100周年記念号）』46(1)、125-143頁
- 安富成良（2009）「アメリカの戦争花嫁へのまなざし―創出される表象をめぐる―」島田法子編著『写真花嫁・戦争花嫁のたどった道 女性移民史の発掘』明石書店
- 安富成良（2010）「アメリカ本土の戦争花嫁と日系コミュニティ―学術研究プロジェクト『海を渡った花嫁たち』での聞き取り調査を中心に」『JICA横浜海外移住資料館研究紀要』5、17-32頁
- 安富成良・植木武（2005）「戦争花嫁のアメリカへの適応について：日本的価値観と欧米的価値観の狭間で」『嘉悦大学研究論集』48(1)、75-97頁
- 安富成良・スタウト梅津和子（2005）『アメリカに渡った戦争花嫁 日米国際結婚のパイオニアの記録』明石書店
- 柳澤幾美（2003）「『写真花嫁』問題とは何だったのか―その言説の形成を中心に」『異文化コミュニケーション研究』（愛知淑徳大学大学院コミュニケーション研究科異文化コミュニケーション専攻・言語文化研究所編／愛知淑徳大学）6、11-24頁
- 柳澤幾美（2005）「ハワイにおける『写真花嫁』問題：日本政府の対応を中心に」『金城学院大学論集、社会科学編』1（1-2）、180-193頁
- 柳澤幾美（2006）「ハワイに渡った日本人『写真花嫁』たち：最初の『写真花嫁』から最後の『写真花嫁』まで」『金城学院大学論集社会科学編』3(2)、129-141頁
- 柳澤幾美（2007）「日本人移民女性たちの日系人強制収容所―『初めての自由』と『アメリカ化』」『移民研究年報』13、99-110頁
- 柳澤幾美（2004a）「『写真花嫁』移民禁止の経緯―日米外交の視点から」『移民研究年報』10；97-107
- 柳澤幾美（2004b）「二重の偏見―『写真花嫁』イメージに隠された日本人女性移民の実像―」田中きく代・高木（北山）眞理子編著『北アメリカ社会を眺めて―女性軸とエスニシティ軸の交差点から』関西学院大学出版会、145-163頁
- 柳澤幾美（2009）「『写真花嫁』は『夫の奴隷』だったのか―『写真花嫁』たちの語りを中心に」島田法子編著『写真花嫁・戦争花嫁のたどった道 女性移民史の発掘』明石書店
- 山田史郎（2006）『アメリカ史のなかの人種（世界史リブレット）』山川出版社
- 山本茂美（2005）「『写真花嫁』に見る日系アメリカ人一世の生き方について」『金城学院大学論集、人文科学編』2(2)、160-168頁